

審査の結果の要旨

氏名 宮下治政

本論文は、生成文法理論に基づく英語史の研究で、目的語として機能する英語の人称代名詞の生起位置の史的变化に焦点をあて、電子コーパスを駆使して実証的に史的資料を検索・調査して得られた知見に対して、普遍文法に関する仮説である原理と媒介変数によるアプローチによって理論的な説明を探り、言語変化に係わる文法の仕組みとそれを律する原理の解明をめざしたものである。

本論文の構成と研究成果は以下の通りである。本論文は、①論考の基盤とする理論的枠組みと研究対象とする言語事象および研究課題を提示した第1章、②古英語ですでに観察されている動詞の目的語人称代名詞や前置詞から分離して生起する目的語人称代名詞の接語化が初期中英語を経て後期中英語に至る時期に衰退・消失する様相を実証的に解明し、人称代名詞を3つのタイプに大別する分析案を精緻化し、それらの構造特性と形式的認可条件を明らかにしたうえで、その消失に関して、キューに基盤を置く言語獲得と言語変化のモデルによって理論的説明を試みた第2章と第3章、③後期中英語に出現した人称代名詞目的語の転位が初期近代英語を経て後期近代英語に至る時期に衰退・消失した様相を実証的に検証し、目的語転位を可能とする3つの要因を明らかにし媒介変数として定式化したうえで、その出現と消失に関して、媒介変数値の設定に基盤を置く言語獲得と言語変化のモデルによって理論的説明を試みた第4章、④第2章から第4章までの考察を踏まえて提示した人称代名詞の形式的認可条件の変化の帰結として目的語人称代名詞の生起位置の史的变化をとらえる論考の妥当性に係わる2つの理論的問題を検討した第5章、⑤研究成果を概括し、その理論的意義を近年提示された不活発理論で示唆されている統語部門内で駆動される言語変化を支持する新たな証拠を指摘したと結論づける第6章からなり、詳細に調査され整理された史的資料が付録とされている。

本論文で問題とされた目的語人称代名詞の接語化に関しては、特定の時代に限定した定性的研究は多数みられるが、電子コーパスが自在に駆使できる今日でも、古英語・初期中英語・後期中英語・初期近代英語を体系的に俯瞰した定量的研究は皆無であり、また、目的語人称代名詞転位に関しては、後期中英語・初期近代英語・後期近代英語・現代英語のどの時代を対象としても詳細な研究はほとんどなされていないのが現状であるので、本論文で明らかにされた実証的知見は貴重な研究成果として高く評される。また、言語変化の動機付けおよび変化の仕組みについて、言語獲得理論に基盤をおいて、古英語から近代英語に至るまでの通時的変化に対して原理的な説明を与えることに成功し、さらに、共時的変異もその射程に入れた研究成果は理論的にも高く評価されるものである。

本論文は、調査結果の解釈について検討を要する部分もみられるが、綿密な論考を積み重ね、英語史研究に対して、多くの理論的貢献をなした労作であると評価された。よって、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいものであるという結論に達した。